
Sham?Holmes

竜零姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sham? Holmes

【Nコード】

N8611X

【作者名】

竜零姫

【あらすじ】

知識でなく、知恵を求めよ。知識は過去の産物だが、知恵は未来をもたらす。考古学者のダニエル・ブライアースが遺体で見つかり、FBIは死因が他殺であると断定する。新米FBI捜査官のルイスはダニエルがインディアン部族に殺害されたと推測。

天才探偵のタツキ・カメルレンゴに出会い、彼と共に捜査をする。やがて、この事件はクレイグ教授によって画策されたより強大な事件のパズルの1つであり、クレイグの策略は世界を死と破壊へ導くものだとわかり…。

#01 (前書き)

縦読みをおススメします。

考古学者のダニエル・ブライアースは、血のにおい気がついた。それが自分の体から発せられているのも知っていた。のしかかる黒い影を、ダニエルは恐怖のまなざしで見あげた。「何が望みだ」

「ムシエルフ」かすれた声が答えた。「パスワードを」

「しかし……それは」

侵入者はまたのしかかり、鋭く尖る物体をさらに強くダニエルの胸に押しつけた。なにかがちぎれる音がした。

ダニエルは苦悶の叫びを漏らした。「パスワードなどない！」意識が遠のくのがわかる。

相手の目が光った。「ウルーラ。それは残念だ」

ダニエルは懸命に意識を保とうとしたが、ますます闇が迫った。

襲撃者がここに来た目的を果たすことはあるまいという確信だけが、せめてもの慰めだった。一瞬ののち、相手はナイフを取り出し、ダニエルの顔へ近づけた。ナイフが宙を舞った。慎重に。正確に。

「神よ、お助けください！」ダニエルは叫んだ。だが、遅きに失した。

タイムズスクウェアにある バージー は、シーフードのサンドウィッチが自慢のレストランだ。働く社会人たちが朝食に常用する場所となっている。今朝の バージー は繁盛していた。銀器のふれ合う音、エスプレッソ・マシーンの響き、そして携帯電話の話し声が渾然と不協和音を奏でている。

その男性客がはいってきたとき、店長は朝のベルガモットをこっそり口にしてるところだった。とつさに笑顔を作って振り返る。「いらつしゃいませ。おうかがいいたします」

それは二十代前半と見受けられる飾り気のない男性で、質素なジヤンバーに、ダークブルーのジーンズ、白いシューズといういでたちだった。背筋がまっすぐに伸び、顎はわずかに持ちあがっているが、傲慢な印象はなく、芯の強さだけが感じられる。

「少し遅れてしまって」男性は控えめな口調で言った。「待ち合わせをしているんです。ミズ・アルバーンと」

「ミズ・アルバーンはボックス席にいらつしゃいます」店長は男性を店の奥へと案内した。

ルイス・J・フリーがボックス席に着いたとき、ミズ・アルバーンは最新の成功談のひとつを携帯電話で声高に語っているさなかだった。ルイスの顔を見るや、グッチの腕時計の文字盤を軽く叩いて遅刻を戒めた。

ああ、僕も会いたかったよ、とルイスは心の中で呟いた。

エミリー・アルバーンは大手ファッションの社員で、ルイスの恋人である。プラダのアイボリーのブラウスに、ガッバーナのショーツパンツ、シャネルのパンプスのいでたち。さすがファッション業

界に勤めているだけのことはある。明るい褐色の髪は、艶やかなカールを肩下でふんわりと波打たせている。セクシーでありながら、人並み以上に聡明であろうことも伝える絶妙の長さだ。

「ルイス！」エミリーは電話を切り、立ち上がって唇にキスをした。「おはよう、エミリー」ルイスはキスを返した。「なんだかくたびれた顔だな」

エミリーはほほえんだ。「第一声がそれなの」

「いいや、ごめんよ。一週間ぶりだな。寂しかったよ」

エミリーはコーヒーをひと口飲んだ。「で、近ごろどんな具合なの」

「忙しいよ。FBI捜査官はいつも頭を働かせてなくてはいけなからね」

「そう。大変そうね」エミリーはわざとらしく肩を竦めた。

「でも僕はこの仕事を生き甲斐にしているわけだし」

「どうやって犯人を見つけるの？」

「第一はプロファイリングかな」

「犯人の特徴を推論したものね」

「そうだ。でもそれだけじゃ解決できない事件がこの世にはたくさんある」

「もし、FBIでも犯人を見つけられなかった場合は？」

「最終手段。世界最高の頭脳に頼る」

エミリーは目を見開いた。「世界最高の頭脳？」

「僕は会ったことないけど、世界最高の頭脳を持つ探偵がいるらしい」

「おもしろそうね」

「そうかな。上司たちは自分たちの出番を横取りされるのが嫌いだから、あんまり頼らないみたいだけど」

「本当にそんな人間がいるなら、一度会ってみたいわ」エミリーの目が好奇心で輝いている。

「噂によると、とんだサイコ野郎らしいけど」

「ただの噂でしょ。FBIは噂なんかで惑わされないんじゃないかなかった？」

「噂も重要な手掛かりだ」

携帯の甲高い音が鳴り、ルイスの目は液晶画面の受信メッセージに引き寄せられた。メッセージの送り主に、ルイスは眉をひそめた。

チャーリー・バラード

ルイスの最も苦手とする男だ。奴は短気な小男。いつも怒鳴っているイメージしかない。ルイスの上司の一人だ。

「ごめん、エミリー。緊急の仕事がはいつた」

「え？今日は有休じゃないの」

「よくわからないが、早く来いだとさ」

「せっかくこの後二人で映画館に行こうと思ってたのに」エミリーは不満を露わにした。

「ごめんな。今度こそ二人で映画館に行こうな」そう言ってルイスはエミリーのおでこにキスをした。

「わかったわ。気をつけて、無理はしないと約束して」

「ああ、約束するよ」

ルイスは出口へ向かった。今度会うときには婚約指輪も一緒だよ。

ルイス・J・フリーは憤懣やるかたないまま、愛車のマーキュリーを駆ってペンシルベニア通り935番北西を進んでいた。その間にも、携帯電話が二・三回鳴った。送られてくるメッセージはどれも同じだった。

“FBIに至急連絡せよ” ため息が漏れた。わかっている、いま行ってるよ！

不安を募らせつつ、いつもの出入り口から入り、本庁のフーヴァービルに到着した。専用の駐車場に乗り入れ、車から降りた。手入れの行き届いた芝生を横切って正面玄関へと向かった。御影石にこう刻まれている。

連邦捜査局 (FBI)

守衛が前方を見据えつつ玄関の両脇を固めるなか、ルイスは防弾使用の回転ドアを通り抜けた。このドアを押すたびに同じ感覚にとられる。眠れる巨人の腹へ忍び入るような気がしてならない。

真っ白な大理石のロビーでは、まるで上階のオフィスから言葉の断片がこぼれ落ちてくるかのように、いたるところでひそやかな話し声が小さく響いていた。タイルを用いた巨大なモザイクの壁面に、FBIの方針が謳われている。

信義・勇気・保全

いつものとおり、外界でかかえていた問題が背後に消え去るのを感じた。この先は闇の世界だ。問題は貨物列車のような轟音とともに訪れ、解答は聞きとれないほどのささやき声で伝えられる。

ルイスは長い廊下を進みながら、どんな事件のせいで何度も携帯

が鳴らされたのかと考えた。

鋼鉄のドアへ近づくと、守衛が笑顔で言った。「おはようございます。通行パスを」

挨拶を返したルイスは、専用の機械にパスを差し込んだ。機械の上の緑のランプが光った。ルイスは機械からパスを引き抜いた。

守衛はウインクをした。「今日もご本人らしいですね。どうぞ」ボタンが押され、重厚な鋼鉄のドアが開いた。

ルイスは複雑に入り組んだにぎやかな廊下へ歩みを進めつつ、一年の歳月を過ごした今もこの組織の規模の大きさに慣れしている自分に驚いた。

FBIは三万人を超える職員を雇用し、年間百億ドル以上の運営資金を得ている。

携帯電話の音が大理石の廊下に鳴り響いた。

またか。もうメッセージをたしかめる気さえなかった。

いったいどうなっているのかと案じながら、ルイスはエレベーターに乗りこみ、まっすぐ最上階へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8611x/>

Sham?Holmes

2011年11月21日11時36分発行